

週刊 武四郎

第44号

2019年(平成31年)2月6日(水)
発行・松阪市

●毎月第一週は、
松浦武四郎の人となりについて
ご紹介いたします

監修・松浦武四郎記念館

御札おふだを書きまくる

松浦武四郎さんが最初の蝦夷地を目指していた時のことです。

東北のある村で、「ここから先の村だけは行かない方がいい」と口々に止められました。なんとそこはやって来た旅人を殺して金品を奪うという恐ろしい村だということです。

ところが、そう言われてもずんずん行ってしまう武四郎さん村に入るなり村人に誰何たれなにされました。

「どこから来た?」

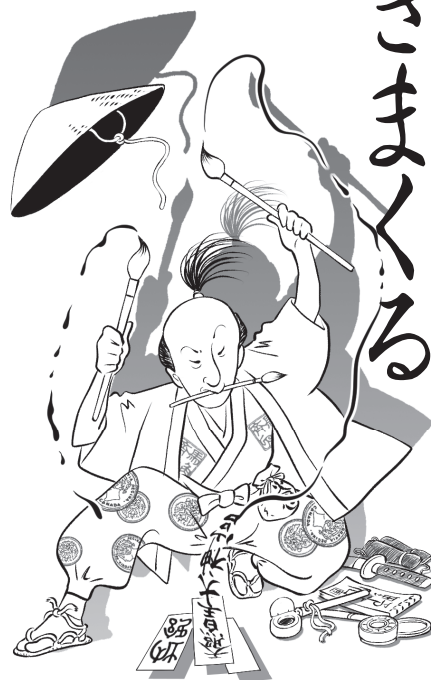
「伊勢から来た」

「……伊勢?」

すぐに村じゅうの人々が物珍しそうにやって来ました。

「伊勢の人が来たって」

村開闢かいはく以来の珍客です。みんな貧しいながらもそれぞれの家から蕪かぶや蛸たこの煮たものなどを持ち寄ってやって来ます。この地



方ではお茶がないので、粟あわを薄い粥かゆのようにしたものをお茶代わりに啜すすりながら、武四郎さんに伊勢の話聞かせてくれ、とねだるのでした。

そこは伊勢街道で育った武四郎さんです(実際、会った人たちは武四郎さんは快活に誰とでも語り合ったと証言していますから)。伊勢の話面白おかしく語ったことでしょう。

翌日、村を去る時に武四郎さんは、こんなにもてなしてくれて……と、せめてものお札に村人たちに一朱しゆずつ渡そうとしました。すると、村長は笑って言

うのでした。

「そんなものもらっても、ここでは何の役にもたちません」

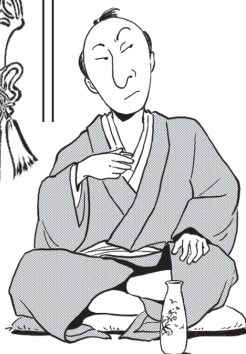
なるほどそうです。替わりに……と、村長は伊勢神宮の御札を書いてくれと懇願こんがんするのでした。そんなことなら造作もないと、武四郎さんは半紙を四つ切りにして、「天照皇大神宮」と大書しました。村長は大喜びです。

ふと、気付くと、戸の隙間からぞーっと覗のぞいていた村人たちが「うちにも書いてくれ」「うちにも」「うちにも」と口々に言い出し……結局、全戸分の御札を書くことになってしまったので

した。
村人たちは御札をもらって大感激して、大量の昆布などをお土産に持たせてくれました。まるでお伽噺おとぎばなしのような話ですが、武四郎さんが蝦夷地探検に際して、アイヌの人たちと友好関係を築くことができたのは、蝦夷地に赴く前の十年あまり……こうして全国を放浪した時に培った経験があったからかもしれません。

松浦武四郎 (1818～1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として(北海道)のもととなる(北加伊道)を含む6案を政府に提案したことから(北海道の名付け親)と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』(河治和香著)が、小学館より好評発売中!

